

## ニセヤグラタケ (新称)

Seijiro Inagaki: Falscher Zwitterling

稲垣清二郎

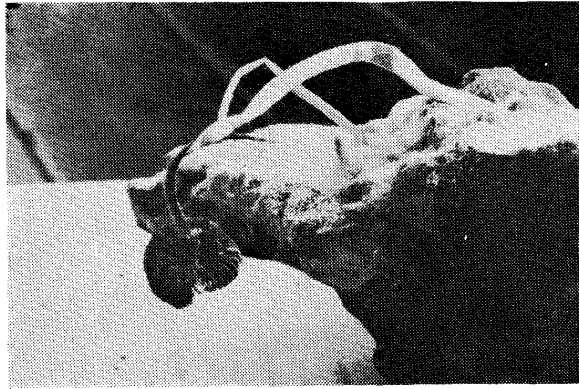
ヤグラタケは櫛茸と書くように茸の上にさらに別の茸が出ているもので、日本にはヤグラタケ *Asterophora lycoperdoides* (Bull.) Ditmar ex S. F. Gray とナガエノヤグラタケ *Asterophora parasitica* (Fr.) Sing. の2種が知られている。欧米でも同様この2種が記載されているに過ぎない<sup>1)</sup>。

ヤグラタケは地上に生ずることはなく、ほとんどすべての場合クロハツタケ *Russula nigricans* Fr. 等のベニタケ属またはチチタケ属の子実体に寄生するキノコで傘またはヒダに金平糖状の突起を有する厚膜胞子の黄粉を帯び、担子胞子の無色、楕円形  $5-6 \times 3.5-4.0\mu$  に比して甚だ大きく、直径  $18-20\mu$  に達するものである。

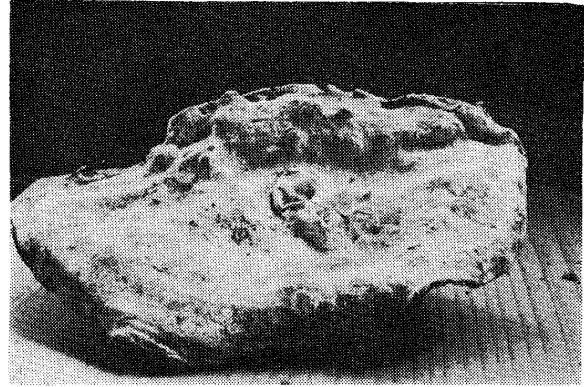


ヤグラタケ (原色日本菌類図鑑第三巻より)

著者は昭和36年秋採集せるツガノサルノコシカケ *Fomitopsis pinicola* (Swarte ex Fr.) karst. を自宅に保存せるところ、昭和37年7月20日その裏面に白色に菌糸の発生を見、5日後には裏面全部に菌糸が叢生し、ほぼ中央に菌糸束の隆起があり、これが短時間して数条の茎となり、先端に径  $2.5-3.0\text{cm}$  の傘を開き、傘の表面灰白色、ヒダは黒色にして茎に離生し、茎は長さ  $5-15\text{cm}$  で太き上部は径  $1.5\text{mm}$ 、中央は太く径  $5\text{mm}$  となり、下部はやや細くなる。茎の上部は白色半透明であるが、中部には白色の細毛密生する。胞子は黒色楕円形  $5 \times 10\mu$  である。



ニセヤグラタケ



ニセヤグラタケ菌糸束隆起

本茸にはヤグラタケのような金平糖状の厚膜孢子がなく、また、担子孢子がヤグラタケの白色に対して黒色であることと、長大なる点において異なっており、M. Moser の *Agaricales*<sup>2)</sup> に記載せる *Coprinus radiatus* (Bolt.) Fr に一致している。なおヤグラタケは *Russula* 属と *Lactarius* 属に寄生するに対して本茸はサルノコシカケ属のツガノサルノコシカケに寄生せる点に大いに異なるものである。このようなヤグラタケは文献にはなく全く新しいものであるにより、著者はこれにニセヤグラタケなる新称を与えることとした。

本名称については最初ヤグラタケモドキを考えたのであるが、その名は *Collybia tuberosa* (Fr.) Kummer の和名<sup>3)</sup> として既に使用されているのでニセヤグラタケとした。

ヒトヨタケ属 *Coprinus* はわが国では今のところ11種報告されているに過ぎないが<sup>4)</sup>、いずれも施肥上、馬糞上、広葉樹古株上或は周囲地上、切株、古丸太、塵屑上に発生するもので、サルノコシカケ属に寄生した報告はないが、伊藤誠哉著日本菌類誌<sup>5)</sup> にはこの属のものには他の蕈菌上等極めて種々なる着生物に生ずるとあるがキノコの種属には何等触れていない。

本茸に極めて近縁のもので今井三子博士によって命名されたるコキララタケ<sup>6)</sup> *Coprinus radians* (Desm.) Fr. があるが、これは茎の根元に黄褐色の菌糸塊 *Ozonium* があり、しかも子実体の発生しない時でも見られることによって本茸とは異なるものである。

## 文 献

- 1) R. Singer: *The Agaricales in Modern Taxonomy*, 215—216 (1962)
- 2) H. Gams: *Kleine Kryptogamen flora Bd II/b<sub>2</sub> M. Moser: Basidiomyceten II* 205 (1967)
- 3) 今関六也, 本郷次雄共著: 「続原色日本菌類図鑑」27 (1965)
- 4) 伊藤誠哉: 「日本菌類誌」Vol. 2. No. 5. 295—297 (1959)
- 5) 同 上 295 (1959)
- 6) 北海道帝国大学「農学部紀要」Vol. 43, No. 2. 301 (1938)